探検實記　地中の秘密

末吉の貝塚

江見水蔭

青空文庫

——神奈川方面不有望——草刈と大衝突——家族擧つての發掘——非學術の大發掘——土器一箇千圓の價？——

玉川向ふ、即ち神奈川縣下に屬する方面には、餘り有望の貝塚は無い。いや貝塚としては面積も廣く、貝層も深いのが無いでも無いが、土器の出方が甚だ惡い。矢上然り、高田然り、子母口然り、駒岡、子安、篠原、樽箕輪最も不有望。

其中で、末吉の貝塚は、稍望みがある。望蜀生が完全なる土器の蓋を掘出して來たので、急に行きたい氣に成り、三十六年十二月十四日に、幻花翁、望蜀生、玄川子との四人連、品川から汽車で鶴見、それから一里弱、下末吉村へと行つた。

一寸知れ難い處である。遺跡は廣いが、先年、チヤンバーレン氏が大發掘を試みたとかで、畑地の方は斷念して、臺地北側の荒地緩斜面の中に四人は入つた。

小さな杉や、丈よりも長い枯萱が繁つて居るので、誰が何處に居るのやら分らぬ。

右端を玄子。それから余。それから幻翁。それから左端を望生。これで緩斜面を掘りつゝ押登らうといふ陣立。

木の根草の根が邪魔をして、却々掘り難い。それに日は當らぬ。寒くて耐らぬ。蠻勇を振つて漸く汗を覺えた頃に、玄子は石劒の柄部を出した。

その他からは、一向珍品が出ぬ。破片は多いけれど、繼いで見る樣なのは出ぬ。中食後に、余は、土瓶の口の上下に、ツリを取つた破片を出した位。

玄翁と望生とは、朱の附着せる貝殼を出したのみ。

失敗して此日は切上げた。

三十七年の正月二日、掘初として余は望玄二子を從へて行つて見ると、這は如何に、掘りかけて居た穴の附近に、大男が六七人居る。然うして枯萱を刈つて居る。ちと具合が惡いので、三人其所に立つて居ると、それと知つた男子達は、聽えよがしに高話である。何處の奴だか、這んな大穴を穿けやアがつた。今度は見附次第、叩殺してやるといふ血腥い鼻息※

已むを得ず、一時、松林の方に退却したが、如何も掘りたくて耐えられぬ。それで余と玄子とは松林に待ち、望生一人を遣つて『いくらか出すから、掘らして呉れ』と申込ましたのである。

いくら立つても望生が戻つて來ぬ。これに心配しながら二人で行つて見ると、大變だ。殺氣立つて居る。

草刈連は大鎌を捻くつて居る。

望生は萬鍬を握〆《にぎりし》めて居る。

望生は余等の顏を見て、大いに氣を強くしたか。

『掘せんといふなら掘らん。掘らうと思へば、どんな事を言つても屹と掘つて見せるが、ナニ、這んな糞ツたれ貝塚なんか掘りたくは無い』と叫ぶのである。

『何んと言ツても駄目だア。子供位ゐ正直な者はねえからね』と向ふではいふ。

形勢甚だ不穩なので、余は兎も角も、望蜀生を呼んで、小聲で。

『如何したのか』

『不穏です。逃げませう』と望生も小聲で言ふ。

それで三人、相談する樣な顏をして、一端松林まで退き、姿が彼等の視線から隱れるや否や、それツとばかり間道を逃出して、裏の池の方から、駒岡の方へ韋駄天走り。

既う大丈夫だといふ所で、望生に一體如何したのかと問うて見ると、草刈の中に、子供が居て、去年の暮、此處へ大穴を開けたのは、此人達だと告げた爲に、いくらお前達が猫を冠つても駄目だと、發掘を承知せぬので、腹が立つたから惡口を吐いたら、先方も憤つたといふ說明。

それは此方が矢張惡い。逃げろ〳〵と初掘りの大失敗。

それから十町と隔たつて居らぬ加瀨の貝塚に廻つて、小發掘を試み、相變らず失敗して歸宅した。

その後飯田氏が發掘を試みたといふ話を聞いた。

三十八年、三十九年、既う電車は通じたし。ちよい〳〵年に四五回位ゐは、他を表面採集の序でに立寄つて、磨石斧、石劒折、打石斧、其他を拾つて居たが、四十年六月十四日に、一人で加瀨、駒岡から、此方へ採集に來た時も、畑の中で一農夫に會つた。其人に問うて見ると、自分の持地からは澤山破片が出るが、未だ誰も發掘した事は無いといふ。然らば近日發掘をさして呉れと其場で手金を打つた。

同月十七日、いよ〳〵發掘に行く事としたが家人も其狀態が見たいといふので、然らば其用意して行くべしとて、妻と婢とに糧食を携へさせ、余は愛する親族の六歲の幼女を背に負ひ、玄子は器具など擔ぎ、鶴見にて電車を降り、徒歩にて末吉に著いた。それが八時半頃であつた。

四圍を綠葉の林でめぐらして居る、其中の畑地。他には人一個見えぬ。

一家族が無人島へ漂着した樣な氣持である。

玄子と余とは先づ林に入りて、樹の枝を折り來り、それを柱として畑中に立て、日避の布片を天幕の如く張り、豆の莖の束にしてあるのを借り來つて、地に置き、其上に布呂敷シオルなど敷いて、座敷を造り、此中に三女を入らしめた。

遊牧民※

其前四五尺の處を、余と玄子とは發掘し始めた。

何も出ない。——出ないけれど面白い。疲勞しては天幕に入り、菓物を食ひ、サイダを飮む。勢ひを得ては又掘りに掛るが、甚だしく何も出て來ない。

見物に對して極りが惡い位ひだ。

おまけに小雨さへ降り出したので、一先づ怪しき天幕の下に、それを避けて居ると、後の畑にごそめく音がするので、見ると唯一人、十六七の少女が、畑の中で草を取つて居る。

濡れるだらうから、此方へ入つたら好からうとすゝめ、菓子などを與へて居る間に、雨も小歇となり、又正午に近くなつた。

少女は去らうとする。

もし又來るならば、水を此瓶に入れて來てよと乞うた。サイダやビールでは米飯は食へぬからである。

少女は忽ち走り去つて、大藥鑵に湯を沸かし、茶道具さへ持つて來て呉れた。

大喜びで、其禮に、若干の銀貨を與へやうとしたが、如何して

も取らぬ。強て取らしめたら、今度は重箱に味噌漬を入れて持つて來て呉れた。

余の一家は悉く涙含んだ。此優しい少女。境遇が變つて居たのと、天候が曇り勝なので、一層我々は人の心の優しさが感じられたのであらう。

午後に至りて、如何も天候が不良である。それで女連だけ先きへ歸へさうとした。

すると幼女が、叔父さんと一處でなければ歸らぬといふ。さらば、叔母達は先きへ歸るが、それでも好いかと言ふに、それにても好しといふ。

看よ、他に人一個居らぬ畑中。其所にわびしき天幕を張りて、降るや降らずの中に居る。それで叔母達は去るとも、叔父と共に此所に留るといふ。

蠻勇、余の如きを、斯くまでに慕ふかを思へば、嬉しいよりも悲しさが浮んで來る。

土器も何も入るものかと、此時ばかりは考へた。

それなら一層の事、皆んなで歸らうとて、發掘を中止し、天幕を疊み、飲餘したる麥酒の壜を携へて、裏の池邊に行き、其所にて又小宴を張り、食物の殘りを池の魚に投與して、荷を輕くし、再び余は幼女を背負ひて、歸路に就いた。

生ける土器の重かつた事。

それからは霎時遠ざかつて居たが、四十一年六月四日に、一人で寺尾、子安、篠原、大網、樽、駒岡の諸遺跡を過ぎて、末吉に掛つて來ると、這は抑も如何に、這は如何にである。

最初に余等が發掘した方面に當つて、人の數、男女を合して十二三人。大發掘をつゞけて居るのを發見した。

何者だらうか？

或はマンロー氏の大發掘では有るまいかと、首を傾けながら行つて見ると、それは土方氏の非學術的大發掘であつた。

土方の親方に就て聞いて見ると、既に一月以上も發掘を續けて居るので、既う二三日で此所は終局だ。これは貝灰を燒く原料として、横濱の石灰製造所で買つたのだといふ。

何か出たかと問ひながらも、眼を四方に配つて見ると、掘出した貝は、一々篩で振つて、貝は貝だけとして、山の如く積んである。破片が其所此所に散亂して居る。胸は土器々々である。

親分氏は、頗る余を輕く見て居る『何も出ねえよ』と云つて、せツせと仕事に從事して居る。

乾漢らしいのが、大聲で『一個が百兩にでも賣れるのなら、賣つても好い』と言ふ。

串戲言ツちやいけぬと思ひながら『一個千兩でも買ふよ』と笑ふて答へると、親分がそれを打消して。

『止せえやい。何も言ふなやい』と留めるのである。

それで余は先づ發掘場を一ト巡りして見ると、珍把手、珍破片、少からず有る中に、大々土瓶の口邊の、最も複雜なる破片が有る。完全で有つたら懸價無しの天下一品だ。いや、破片でも大珍品たるを失はぬ。

それで『這んな破片を貰つても好えかね』と問うて見ると『そんな物ならいくらでも持つて行きねえ』といふ。

難有いと、それを鞄に入れて居ると、篩で貝を選つて居る女土方が、小さな聲で。

『あんな事言つて、親分トボケて居るが、面白い土瓶見たやうな物だの、香爐見たやうな物だの、澤山掘出して持つて居るだよ』と教へて呉れた。

其所で余は改めて、親分に談判を試みたが、頑として應じない。

横濱の西洋人に賣れば、一箇が百兩にはなるんだなんて、夢を見て居る馬鹿らしさ。

決して然ういふ相場の有るものでは無いと辯を振つて説いて見たが、肯かぬ。

お前はそんな事を云つて、胡麻化すんだ。屹と仲買して歩くんだらうと、いや、はや、沒分曉漢の親分※

我を折つて、それ切り余は引揚げたが、如何も氣に成つて耐えられぬので、再び談判に行かうと思つて居ると、友人の眉山子が例の自殺。

それでいろ〳〵手が引けなくつて、漸く七月十一日に末吉へ駈付けて見ると、貝殻の山だけ白く遺つて、あゝ因業な親分等は、一人も影を見せぬのであつた。

土瓶形、香爐形、洋人が百圓宛で買つたらうか。恐らく今頃は、あの男に、十箇二錢五厘で賣つた方が好かつたと、後悔をして居るであらうよ。

青空文庫情報

底本：「探検實記　地中の秘密」博文館
1909（明治42）年5月25日発行
入力：岡山勝美
校正：岩澤秀紀
2012年2月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

探檢實記　地中の秘密

末吉の貝塚

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　江見水蔭
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/